

国際バカロレアを視野に入れた道徳教育

福山文子

1. はじめに

文部科学省によれば、道徳教育は「児童生徒が、生命を大切に作る心や他人を思いやる心、善悪の判断などの規範意識等の道徳性を身に付けること」¹と、捉えられており、社会を成立させるうえで大切なものといえる。しかしながら、1958年の「道徳の時間」特設の際にはさまざまな論争があり²、また、近年では、「道徳の時間」が、今後「特別の教科 道徳」へ変更されようとしていることにかかわり議論が活発化している。光田（2014）は、このようにあらためて注目を集めている道徳教育について、「何をどのように指導すれば教育の改善や充実が可能となるのかという、いわば道徳教育の根幹にかかわる課題がまだまだ十分に共有されていない」とし、道徳教育の改善や充実へ向けて対応する必要性について指摘している³。

根幹にかかわる課題が十分に共有されていない背景には何があるのだろうか。例えば河合（1987）は、「道徳とは、簡単に言えば、人間が生きてゆく上において守らなければならない規則の総体である」とした上で、時代や文化の差により異なり得るものであり、道徳性はきわめて創造的なものであると論じている⁴。また、佐貫（2015）は、「道徳性の危機は、人間の中、個人の心の中、とくに子どもや若者の心の中にあるという考え自体を疑わなければならない」とし、現在の異常な社会の状況を異常なものとして認識することのできる人間的感覚の回復こそが、道徳性の基盤に据え直されるべきとする。そして、大人、教師、地域が、社会に生じている様々な課題に向き合い、必死で取り組み、勇気ある正義の選択を行うことなしに、道徳性の教育は出来ないと述べる⁵。さらに、今日的な課題を踏まえ、新しい役割も期待されている。池田（2015）は、「今日の多文化・多言語・多宗教といった状況にあって、価値のぶつかり合いの調整は社会的課題でもある。そこでは、各人が身に付けている価値判断そのものが揺さぶられる。このような多様な価値のぶつかり合いの中から、いかに合意形成をしていくかが道徳教育に問われているのではないか」と論じている⁶。以上のことから、道徳や道徳性にかかわり、時代や文化の差により異なり得るものと認識すること、既存の価値観等を批判的に考察する力、価値のぶつかり合いを経た合意形成などが指摘されていることがわかる。このような指摘を踏まえ、何をどのように指導すれば教育の改善や充実が可能となるのかという課題に対する必要があるだろう。

本稿では、このような道徳教育の課題に向き合うために、国際バカロレアに着目する。国際バカロレアは、その認定校の大幅な増加（2018年までに200校）が政府文書の中で明記されるなど、近年グローバル人材育成にかかわり注目を集めている。しかし、「よりよい世界、より平和な世界を実現するために、多文化への理解と尊重を通して、探究心、知識と思いやりのある若者を育てること」「自分と異なる他者もまた正しいことがあるということを理解する積極的で、思いやりのある生涯学習を継続する学習者であることを奨励する」などを理念として掲げるこの教育プログラムは、道徳教育を改善、充実させる可能性もま

た有しているのではないだろうか。

そこで、国際バカロレアの理念、および学習者像等を整理し、同プログラムと道德教育との関係をおさえた上で、国際バカロレア認定校である東京学芸大学附属国際中等教育学校の紀要に掲載された実践を支援として用いながら、道德教育における国際バカロレアの意義と可能性について論じていくこととする。

2. 国際バカロレアの理念と学習者像

ここでは、国際バカロレアの概要、近年の日本における国際バカロレアをめぐる動向、国際バカロレアの理念、そして学習者像について整理する。

(1) 国際バカロレアとは

国際バカロレアとは、1968年に非営利団体として発足した、国際バカロレア機構（International Baccalaureate Organization：本部はスイスのジュネーブ）が提供する国際教育プログラムのことである。当時、国によって教育制度や教育カリキュラムが異なるなど、自国以外の大学への進学が容易にできない事情が多くあり、世界中どここの国からも優れた大学に進学できるレベルの高い教育制度が求められていた。また第2次大戦の反省から、国家主義の反映ではない、つまりどこの国の教育政策にも偏らないグローバルな平和主義の視点に立脚した教育の必要性も求められていたといわれている⁷。このような発足の目的に照らしても整合性があることだが、国際バカロレアのカリキュラムのベースには、国境を越えて共生や平和を目指す視点や、多様な価値観を受け入れる姿勢がある。また、国際バカロレアのプログラムには、PYP（Primary Years Programme：初等教育プログラム）3歳～12歳対象、MYP（Middle Years Programme：中等教育プログラム）11歳～16歳対象、DP（Diploma Programme：ディプロマ・プログラム）16歳～19歳対象の3つのプログラムがある。

(2) 近年の国際バカロレアをめぐる動向

国際バカロレアと日本の文部科学省とのかわりには1979年にさかのぼるもの⁸、国際バカロレアは、この数年の中で「グローバル人材」や「生きる力」に関連して、審議のまとめや報告書に書かれるようになったといえる。2011年5月に設置された、「グローバル人材育成推進会議」の「審議のまとめ」（平成24年6月）においては、「グローバル人材」にかかわり、英語教育の強化が重要とされ、「二者間折衝・交渉レベル」や、「多数者間折衝・交渉レベル」を意識したグローバル人材の育成のため、「国際バカロレア資格への対応等を進めるとともに、飛び入学や早期卒業を活用して多様で柔軟な進路設計を促進する」と記されている。また、文部科学省の提言として「高校卒業時に国際バカロレア資格を取得可能な、又はそれに準じた教育を行う学校を5年以内に200校程度へ増加させる。」との記述がある。そして「国際バカロレア・ディプロマプログラムにおける『TOK』に関する調査研究協力者会議の報告書」（平成24年8月）においては、「国際バカロレア教育は、我が国の子どもたちがより一層『生きる力』を身に付け、今後、グローバル化社会の中で活躍していくため、初等中等教育段階における諸課題に対して解決策の1つを提供しうる可能性を持つものであり、国際バカロレアへの関心が高まってきているところです」との記載が認められる。さらに、教育再生実行会議第三次提言「これからの大学教育等の在り方について」（平成25年5月28日）には、「国は、国際バカロレア認定校について、一部日本語によるディプロマ・プログラムの開発・導入を進め、大幅な増加（16校→200校）を図る」とある。

国際バカロレアを視野に入れた道徳教育

つまり、国際バカロレアのプログラムを通して、語学力・コミュニケーション能力の中でも、より高次のレベルである「二者間折衝・交渉レベル」や「多数者間折衝・交渉レベル」を目指す上で期待がかけられていると同時に、「より一層『生きる力』を身に付ける」ことも期待されていることがわかる。そして2013年に閣議決定された『日本再興戦略—JAPAN is BACK—』(平成25年6月)において、「世界に勝てる」人材を育成する「学校群を形成」するための具体的方策として、国際バカロレア日本語DP(ディプロマ・プログラム)⁹を切り札に、明確に国際バカロレア認定校の目標数が示されたのである。

(3) 国際バカロレアの理念

国際バカロレアの理念である、ミッションステートメントは以下の通りである。

- ・よりよい世界、より平和な世界を実現するために、多文化への理解と尊重を通して、探究心、知識と思いやりのある若者を育てることをねらいとする。
- ・これを実現するためにIBOは学校、政府、国際機関などと協力しながら、国際理解の精神と厳密な評価の精神に則ったプログラムの開発に取り組む。
- ・これらのプログラムは世界各国の子どもたちに自分と異なる他者もまた正しいことがあるということを理解する積極的で、思いやりのある生涯学習を継続する学習者であることを奨励する。

この理念から読み取れるように、国際バカロレアのカリキュラムのベースには、国境を越えて共生や平和を目指す視点や、多様な価値観を受け入れる姿勢、異なる他者への尊重の意識などがあると考えられる。そして、ディプロマ・プログラムという、最終試験が課される高2～高3対象の2年のプログラムにおいては、国際バカロレアの教育哲学の中核と言われるTOK(Theory of Knowledge: 知の理論)の授業を履修する。TOKでは、学際的な観点から個々の学問分野の知識体系を吟味して、理性的な考え方や客観的精神を養い、さらに、言語・文化・伝統の多様性を認識し国際理解を深めて、偏見や偏狭な考え方を正し、論理的思考力を育成する¹⁰。そして、教師は生徒とともに知識の批判的検討に取り組みながら、生徒のうちに「知識を探究するということ」について、重要性、複雑さ、人間にもたらす影響について理解を深めさせることになる¹¹。このようにディプロマ・プログラムでは、総合的でバランスのとれたカリキュラムが提供され、プログラム全体を通じ、生徒に論理的思考力や表現力、さらには探究心や学術的思考、異文化に対する理解と寛容性などを育むことが重視されるといわれている。また、国際バカロレアでは、すべてのプログラムにおいて学習したことを実社会での出来事や問題と関連付け、実際に活用できるよう配慮した学習活動を行うことが重視される。

(4) 国際バカロレアの求める学習者像

前述の理念を踏まえつつ、プログラムを通じた学びの結果として求められる学習者像(The IB Learner Profile)は、以下の通りである。

- ・Balanced: バランスのとれた人
- ・Caring: 思いやりのある人
- ・Communicators: コミュニケーションができる人
- ・Inquirers: 探究する人
- ・Knowledgeable: 知識のある人
- ・Open-minded: 心を開く人

- ・ Principled : 信念を持つ人
- ・ Reflective : 振り返りができる人
- ・ Risk-takers : 挑戦する人
- ・ Thinkers : 考える人

国際バカロレアの求める学習者像からは、人間性や知識、思考力を基盤として、他者とコミュニケーションを取りつつ、課題に取り組む人物像が浮かび上がる。

3. 国際バカロレアと道徳教育

平成27年9月1日現在、学校教育法第1条に規定されている学校（一条校）で国際バカロレアに認定されている学校は、学芸大学附属国際中等教育学校をはじめ、12校ある。つまり、その12校では既に、道徳や日本の教科と国際バカロレアの教科群との対応が図られ、学習指導要領との整合性が担保されているといえる。

このように、既に学習指導要領と矛盾なく実施されている国際バカロレアであるが、ここでは国際バカロレアの教育哲学の中核と言われるTOKの概要をつかみつつ、道徳教育の目標等を整理することを通して、国際バカロレアと道徳教育は、相互に補完し得ることをあらためて示したい。

(1) TOK (Theory of Knowledge : 知の理論) について

TOKとは、前述の通り国際バカロレアの教育哲学の中核と言われるものである。そして、TOKの学習では学際的な観点から個々の学問分野の知識体系を吟味して、理性的な考え方と客観的精神を養い、さらに言語・文化・伝統の多様性を認識し国際理解を深めて、偏見や偏狭な考え方を正し、論理的思考力を育成するといわれる。また、生徒たちが、様々な場面に直面した際に状況理解の指針となる考え方として、物事を多様な観点から考察する力（クリティカル・シンキング）が重視される。生徒は、「知識とはどのようなものか」「知識の限界とは」「知識は誰のものなのか」といった視点で学びながら、新しいことを学ぶという側面から少し離れて、既に持っている知識に対し「それは正しいことなのだろうか」という疑問も含め深く思考することとなる¹²。以下に、TOKのねらいと学習目標を記す。

●TOKのねらい

- ・ 高度な知識を獲得することへの興味・関心を高め、その欲求を満たすための努力を促す。そのような考え、意識を持つことにより、資質・能力を更に高めていく。
- ・ 個人やコミュニティにおいて、どのように知識が構築され、批判的に検証され、評価され、また、新しい知識と置き換えられていくのかを認識させる。
- ・ 日常の学習生活における「学習者」としての経験を振り返り、異なる学問分野における様々な考え方、感じ方、行動などの関連について考えるよう促す。
- ・ 個人やコミュニティにおける生活様式や考え方の違いに興味を持ち、自分自身の視点での感じ方と他者の視点からの感じ方の違いについて認識するよう促す。
- ・ 世界市民としての個人やコミュニティと知識との関係に付随する責任に関する認識を促す。

●TOKの学習目標

- ・ 知識が示すもの、その前提にあるもの、背後にある意味などを批判的に分析する。

- ・「学習者」としての生徒自身の経験や「知識の領域 (Areas of knowledge)」、「知るための方法 (Ways of knowing)」などの学習に基づいたKnowledge Issue に関連する質問、説明、推測、仮説、仮説への反論、可能性のある解決法を導き出す。
- ・Knowledge Issue¹³に対する様々な異なる考え方や認識について理解を示す。
- ・Knowledge Issueへの様々なアプローチの仕方について関連付けや比較を行う。
- ・Knowledge Issueへの取組に個人的に自覚を持って対応できる能力を身に付ける。
- ・学問的誠実さ、正確さに十分に配慮しながらアイデアを練り、他者へははっきりと伝える。

この、TOKのねらいや学習目標をみると、国際バカロレアが、批判的考察力を重視し、知識が構築されるものにとらえたうえで、その背景まで見据える必要があるとの認識に立っていることがわかる。そして、論理的思考力を育みながら、自分と異なる他者を尊重し、世界市民としての認識を深めていることが読み取れる。

(2) 道徳教育の目標

1872年に、教師が生徒に「口授」によって授ける方法が用いられた「修身口授 (ぎょうぎのさとし)」として登場して以来、それまでの道徳教育の方法は時代の変遷とともにその性格や内容を変えながら、1945年に連合国軍総司令部 (GHQ) より廃止されるまでのあいだ、日本の教育の方向を決定づける役割を担ってきた。戦後は、1951年に「道徳教育振興方策」が決定され、1957年に文部大臣は、「小中学校の教育課程の全面的改訂」について教育課程審議会に諮問し、同審議会は「道徳教育のために時間を特設すること」と答申した。その後1958年に特設された「道徳教育の時間」をめぐるのは、教育勅語と結びついた修身科の復活であり、また軍国主義に味方するものとして厳しい批判もあったといわれる¹⁴。

では現在、道徳教育の目標はどのようになっているだろうか。文部科学省『中学校学習指導領』を例にとると、第1章総則第1の2に道徳教育の目標について、下記のように記されている。

道徳教育は、教育基本法及び学校教育法に定められた教育の根本精神に基づき、人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念を家庭、学校、その他社会における具体的な生活の中に生かし、豊かな心を持ち、伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛し、個性豊かな文化の創造を図るとともに、公共の精神を尊び、民主的な社会及び国家の発展に努め、他国を尊重し、国際社会の平和と発展や環境の保全に貢献し未来を拓く主体性のある日本人を育成するため、その基盤としての道徳性を養うことを目標とする¹⁵。

また、道徳の時間を要として学校の教育活動を通じて行う道徳教育の内容は、「主として自分自身に関すること」「主として他の人とのかわりに関すること」「主として自然や崇高なものとのかわりに関すること」「主として集団や社会とのかわりに関すること」となっている。

国際バカロレアと道徳教育は、両立が前提であるからこそ、一条校の国際バカロレア認定校が既に存在し、また閣議決定において認定校の大幅増加について明記されたのであろうから、当然の帰結ともいえるが、両者は相互に補完し得るものと考えられる。批判的考察力や理論的思考力は、「未来を拓く主体性のある日本人を育成」するうえで、大切な前提であろう。また、他者を尊重する姿勢と、「他国を尊重」することの間には、通底するものがある。

4. 国際バカロレア認定校の実践

ここではまず、一条校のひとつである東京学芸大学附属国際中等教育学校への訪問¹⁶を踏まえつつ、同校の授業にかかわる学習観について論じる。次に、同校の研究紀要をもとに、道徳と関連する国際教養に関わり、その概要と実践について述べる。

(1) 国際バカロレアと授業にかかわる学習観

国際バカロレアのプログラムは、プロセスを重視し、多面的な評価を行うなど、その特徴はさまざま語られているが、学習観についても特筆すべき点がある。東京学芸大学附属国際中等教育学校の担当教師からは、実際の社会とのつながりを意識した授業を展開するとの発言があった。そして、「国際バカロレアでは、知識ではなく概念を教えてくださいと言われる。恐竜の名前を覚えるのではなく、“絶滅”という概念を教えます。そして、そのような学びは汎用性が高いのです」「数学を通して、コミュニケーションを学ぶことも可能です。“数学におけるコミュニケーション”であれば、スキルをどう生かしていくのかにかかわり、ビジョンを語れないといけない。人に説明できないといけないのです」「バスケットボールを通して、“秩序”を学ぶことも可能です。バスケットボールで将来の課題に向かい合うために役立つ概念を学ぶことができます」といった説明を受けた¹⁷。同校においては、「知識は教えるのでなく」、「実際の社会とのつながり」のなかで学んでいくものとして捉えられていると言えよう。

このような授業にかかわる取組からは、知識が学習者自身により構成されるという知識論に立ち、併せて学習者自身が知識を構成するという学習論に依った「構成的な学び」という教育理論が想起される。ジョージ・ハイン (Hein, George E.: 1998) は、「Constructivism (構成主義)」に関わる教授法には、以下の留意点があると述べている¹⁸。

- ・学びは教えずとも生じるものであり、経験が最も優れた教師であるとの前提に立つ
- ・一方で教師は、学びが生じ得る、豊かで価値のある環境を提供することが求められる

つまり、「学びが生じ得る、豊かで価値のある環境を提供する」教師の力が、「構成的な学び」を可能とするのである。同校においては、「知識」を詰め込むのではなく、「人に説明する」という体験や、バスケットボールを行う中で課題に出会い、その課題を解決するためのものとして「秩序」が認識されるという、実際の文脈の中で体験を通して「知」が構成されるという学習観に立っていると考えられる。

また、授業デザインに関しては、「基本概念を具体化するために各教科における教科間連携や表現活動・言語活動、英語および英語以外の言語の学習などを重視した授業や活動を展開している」との説明を受けた。実際に類似した概念が複数の教科で教えられており、教科横断的な学びを可能とする授業デザインを、学校全体で描いている様子を読み取ることができた。

(2) 学芸大学附属国際中等教育学校における国際教養

学芸大学附属国際中等教育学校は、現在1年生から4年生（高校1年生に該当）までの全生徒を対象とした国際バカロレアの中等教育プログラム実施校である¹⁹。同校には、国際教養という学習領域群がある。この国際教養とは、「総合的な学習の時間・道徳・ホームルーム活動・科目の一部を統合再編²⁰した同校独自の学習領域として設置されたものであり、6年間を通じた学習活動によって、国際社会の中で、共生・共存できる人材の育成を目標としている²¹。つまり、同校では国際教養の中で道徳教育が行われているのである。また、この国際教養は、「グローバルスタンダードの教育」である国際バカロレアの中等教育

プログラムの考えをもとに、国際理解・人間理解・理数探究という3つの柱で構成されるカリキュラムの一つであり、同校の教育の特徴の第一に挙げられている²²。したがって、この学習領域群には、国際バカロレアの理念や哲学が活かされていると言えるだろう。

同校の研究紀要である『国際中等教育研究』には、6つの国際教養の実践が掲載されている。ここでは、この紀要をもとに、それらの実践について概略を示すとともに、道徳教育の内容との関連について論じていく。

① 生徒一人一人が主体的に「豊かさ」を追求するESD～コミュニティーサービス活動を軸として～（対象：第2学年）

生徒一人一人が学校や地域の様々な活動に参画し、「豊かさ」について多面的、多角的にアプローチすることにより、持続可能な発展のための教育（ESD）という概念の形成・獲得を目指すことをねらいとする。「豊かさ」とは、何かということを経営記事のスクラップ活動に取り組むことから生徒一人一人が自分なりにとらえたことをイメージマップにまとめ、ミニワークショップを開催し、「豊かさ」を、人間の生き方やあり方を深く理解すること・国際的な視点からとらえること、科学や技術の視点からとらえること、という3点からイメージの共有化を図る。その後、練馬区大泉学園ボランティアセンターの武石氏を講師に迎え「豊かさ」をボランティアの視点から考える。最後に、自分の住むまちのフィールドワークを通して、「豊かさ」を具体的にとらえ、さらに「豊かさ」を追求することをテーマとするコミュニティーサービス（社会貢献：横浜市寿町での炊き出し及び福祉作業所訪問ボランティアなど）活動に取り組む。

ここでは「豊かさ」という、既に持っている知識に対し「それは正しいことなのだろうか」という疑問も含め深く思考する姿が見て取れる。また、紀要には明記されていないが、中学校学習指導要領「道徳」の「内容」のうち、「主として集団や社会とのかかわりに関すること」との関連が認められる。

② 沖縄の事前・事後指導を兼ねた「フィールドワーク」（対象：第3学年）

沖縄に関する専門家である、内閣府政策統括官（沖縄政策担当）と朝日新聞の編集委員を訪問し、今後のワークキャンプの基礎となる話を聞き質疑を行う。内閣府では、沖縄史・米軍基地・観光と環境問題・沖縄の現状等にかかわる説明を受ける。新聞社の編集委員は、国内の米軍基地の74%が沖縄に集中し、嘉手納市の面積の80%以上を基地が占める現状を伝える。また、「沖縄が基地を引き受けてくれて日本の平和が成り立ってきたということを忘れないで、自分の問題として考えて欲しい」と強調し、生徒の側からは「相手の立場に立った視点を持つにはどうすればいいか？」などの質問が出されるなど、活発な質疑が行われた。

ここでは、「相手の立場に立った視点」に関心を向ける生徒の姿を認めることができる。また、この実践は道徳の内容のうち、「主として集団や社会とのかかわりに関すること」との関連が認められる。

③ 3泊4日の「沖縄ワークキャンプ」（対象：第3学年）

Unit Question²³を「沖縄の諸課題に対し、私たちにできることは何か？」とし、日本における唯一の地上戦が繰り返された沖縄を訪ねることにより、平和を希求する心を育てること、「基地の島：沖縄」で生活する人々と直接対話する中で、「沖縄の心（肝心／チムグクル）」（肝心=人間の尊厳を何より重くみて、戦争につながる一切の行為を否定し、平和を求め、人間性の発露である文化をこよなく愛するところ）を知り、共に生きる決意をかためる契機とすること、そして、沖縄の自然「紺碧の空・群青の海」を五感をフル活動させる中で、持続可能な社会は、いかにあるべきかを考える機会とすることを目的に掲げて、

沖縄修学旅行を行った。4日間に亘る日程の中には、元ひめゆり学徒隊員による講演、糸数壕（アブチラガマ）、アンティラガマの体験、が含まれている。また、事後アンケートの結果、このワークキャンプを一言で表現した場合、あたたかさ、つながり、くくる（心）、戦争と平和、戦争と基地、いのちの大切さ、ゆいまーる、自然との共存、いのち、などのことばがあてはまるとの回答が得られている。

アンケート結果からは、平和や共生について深く思考する様子がみてとれる。また、この実践は道徳の内容のうち、「主として自分自身に関すること」「主として他の人とのかかわりに関すること」「主として自然や崇高なもののかかわりに関すること」「主として集団や社会とのかかわりに関すること」のすべてに関連する学習であると考えられる。

④ 沖縄の学習にかかわる「Pre Personal Project(PPP)」(対象：第3学年)

同校が実施している、Middle Years Programmeでは、プログラムの最終学年である高校1年生次に集大成ともいえる「Personal Project」²⁴を作成しなければならない。そのための準備として、「Pre Personal Project(PPP)」と称し、沖縄ワークキャンプで学んだことを「プロセスジャーナル（研究過程を記した日誌）」、「作品」、「発表会での口頭発表」の3点をもって総括した。生徒に対し、作品（学習成果物）制作時の困難及び解決策を示すことや、作品制作過程と作品についての自己評価を行うことなどを指示した。

この実践は道徳の内容のうち、「主として集団や社会とのかかわりに関すること」に関連する学習であると考えられる。

⑤ 職場体験としての「ジュニア・インターンシップ」(対象：第3学年)

事前学習として「はたらく人のやりがい・みちのりBook」(河合塾編)を購読し、さらに保護者を講師としてキャリアワークショップ「仕事についての理解を深めていこう」を実施した。その後、約50の受け入れ企業を探し、ジュニア・インターンシップを行った。インターン・シップ後は、活動報告として、写真を添付して、スクールフェスティバルで展示することが想定されている。

紀要には明記されていなかったが、この実践は道徳の内容のうち、「主として集団や社会とのかかわりに関すること」に該当する学習であると考えられる。

⑥ 「まちづくり」について議論しよう！(対象：第1学年)

この実践は、中学校学習指導要領「道徳」の「内容」のうち、「主として集団や社会とのかかわりに関すること」に該当する学習であるとともに、「総合的な学習の時間」、および「基礎地理」(社会科〈地理分野〉)とも連携して学習が進められた²⁵。

まず、入学直後の4月に学校の所在地である大泉学園駅周辺のフィールドワークを実施する。その際のUnit Questionは、「国際中等教育学校のある大泉学園はどのようなまちだろうか？」である。次に「環境に対して私たちが貢献できることは何か？」というUnit Questionのもと、生徒の自主フィールドワーク「地元のまちづくりを紹介する～私のまちの宝物はこれだ～」を実施する。

紀要に明記されているように、「主として集団や社会とのかかわりに関すること」に関連する学習と言える。

紀要には、⑥以外、「道徳」の「内容」のうち、どれに該当し、どの教科と連携関係にあるのかは明記されていなかった。しかし、実践の概略は、道徳などが統合再編された国際教養を理解する上で一助とな

るであろう。例えば、①生徒一人一人が主体的に「豊かさ」を追求するESD～コミュニティーサービス活動を軸として～では、「豊かさ」という既存の知識や概念を、多様な角度から検討することで、思考力が深められる様子が見取れる。②沖縄の事前・事後指導を兼ねた「フィールドワーク」においては、「相手の立場に立った視点」に関心を向ける生徒の姿を認めることができる。これは、多様な価値のぶつかり合いの中から合意形成に向かおうとする一歩とも捉えられよう。また、③3泊4日の「沖縄ワークキャンプ」における、平和や共生について深く思考する様子は注目に値するのではないだろうか。

無論、これらの実践は、日頃より実際の文脈の中で体験を通して「知」が構成されるという学習観や授業デザイン等にも支えられていると考えられ、国際教養という学習領域群のみで語ることはできない。しかし、国際バカロレアの理念や哲学に基づき道德などを統合再編するというプロセスを通じ、既存の価値観等を批判的に考察する力、価値のぶつかり合いを経た合意形成への意識、共生や平和を目指す視点などが獲得される可能性が指摘されるのではないか。

5. まとめにかえて ー国際バカロレアを視野に入れる意義と可能性ー

本稿では、道德や道德教育にかかわり、時代や文化の差により異なり得るものと認識すること、既存の価値観等を批判的に考察する力、価値のぶつかり合いを経た合意形成などが指摘されていることを認識したうえで、道德教育の課題に向き合うために、国際バカロレアに着目した。国際バカロレアのカリキュラムのベースには、国境を越えて共生や平和を目指す視点や、多様な価値観を受け入れる姿勢、異なる他者への尊重の意識などがあると考えられ、また、国際バカロレアの教育哲学の中核と言われるTOKからは、批判的考察力を重視し、知識が構築されるものにとらえようとして、その背景まで見据える必要があるとの認識に立っていることが理解できた。

そして、認定校の具体的実践からは、国際バカロレアの理念や哲学に基づき道德などを統合再編するというプロセスを通じ、既存の価値観等を批判的に考察する力、価値のぶつかり合いを経た合意形成への意識、共生や平和を目指す視点などが獲得され得ることが示唆された。つまり、国際バカロレアを視野に入れた道德教育を展開することは、河合（1987）、佐貫（2015）、そして池田（2015）による道德教育にかかわる指摘に応答するための、一つの方法となる可能性がある。

さらに、2015年7月23日に開催された平成27年度教科用図書検定調査審議会総会（第3回）において、「考える道德」、「議論する道德」への転換や言語活動、問題解決的な学習、道徳的行為に関する体験的な学習について言及がなされている²⁶。考え、議論するためには、既存の知識を基盤としつつも、知識を吟味し、客観的・理性的な思考力が求められる。「考える道德」、「議論する道德」への転換を踏まえても、国際バカロレアを視野に入れることには意義があると考えられる。

多文化化が進展しつつある現状において、道德教育の役割はますます重要になっていくだろう。折しも国際バカロレア認定校を200校へ増加させる方針が示され、これまで外国語でしか提供されなかったディプロマ・プログラムが、日本語で提供されることにもなった。認定校以外でも、このプログラムにかかわる情報は今まで以上に得やすくなることが期待される。また本稿で取り上げたように、認定校で積み上げられてきた実践は公開されている。既にグローバル人材育成にかかわり、大きな期待がよせられている国際バカロレアであるが、より豊かなかたちで道德教育の改善と充実をすすめるためにも、このプログラムを視野に入れた実践が行われることが求められよう。

(注)

- 1 文部科学省HP「道德教育」より。http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/doutoku/ (2015年9月8日取得)。
- 2 イデオロギーにかかわる批判としては、例えば法律学者の戒能通孝が「政治教育ではなくて政党政治教育ではないか。教育基本法第10条にも反するような道德教育が政治的干渉によってもちこまれていること自体、道德教育とは縁もゆかりもない修身教育の復活にならないと想像するほうがバカである」と厳しく論じている。戒能通孝「道德教育と憲法と」貝塚茂樹監修『文献資料集成日本道德教育論争史 第三期戦後道德教育の停滞と再生第12巻「特設道德」論争』日本図書センター、2015、p.294。
- 3 光田尚美「学校における道德教育の可能性と課題—道德教育の方法に着目して—」近畿大学編『近畿大学教育論叢』第26巻第2号、2014、p.51、63。
- 4 河合隼雄「子どもの倫理と道徳性」東洋、稲垣忠彦他編『岩波講座教育の方法9』岩波書店、1987、pp.329-368。
- 5 佐貫浩『道徳性の教育をどう進めるか』新日本出版社、2015、pp.227-237。
- 6 池田賢市「道徳の教科化をどう考えるか」『教育×Chuo Online』
http://www.yomiuri.co.jp/adv/chuo/research/20141204.html (2015年9月11日取得)
- 7 (社)グローバル教育情報センターHPより。http://geic.jp/international-baccalaureate (2015年9月10日取得)
- 8 文部科学省は、1979年に国際バカロレア資格を有する者で18歳に達した者を大学入学に関して高等学校を卒業した者と同等以上の学力があるものとして指定している。そして、同年より30年以上にわたり、毎年国際バカロレアに資金を拠出してきている。
- 9 国際バカロレアのディプロマ・プログラムは、授業、試験ともに英語、フランス語、スペイン語のいずれかで行われるのが基本である(一部、試験的に中国語とドイツ語でも行われている)。国際バカロレア日本語DP(ディプロマ・プログラム)とは、最終試験が課されるディプロマ・プログラムを日本語と英語の両言語を用いて指導・評価するものであり、日本の学校のより多くの生徒が国際バカロレアディプロマの教育で学ぶことを目標としている。
- 10 国際バカロレア・ディプロマプログラムにおける「TOK」に関する調査研究協力者会議『国際バカロレア・ディプロマプログラム Theory of Knowledge (TOK) について』2012年8月、p.11。
- 11 大迫弘和『国際バカロレア入門—融合による教育イノベーション—』学芸みらい社、2013、p.88。
- 12 TOK (Theory of Knowledge: 知の理論) については、国際バカロレア・ディプロマプログラムにおける「TOK」に関する調査研究協力者会議、前掲書、より。
- 13 TOKのキーワードのひとつ。知識を獲得する、追究する、生み出す、形作る、受け入れるなど、知識との様々な関わりを通じ、自分自身や周囲の人々、さらに、それを取り巻く世界を理解していく上で生じる様々な疑問をKnowledge Issue と呼ぶ。TOK においてIssue は、「問題」という面だけではなく、何かを学び取るための探究へ導くものとして扱われるとされる。国際バカロレア・ディプロマプログラムにおける「TOK」に関する調査研究協力者会議、前掲書、より。
- 14 行安茂・廣川正昭編『戦後道德教育を築いた人々と21世紀の課題』教育出版株式会社、2012、p.231。この文献において、厳しく批判した人物として、法律学者の戒能通孝が挙げられている。
- 15 文部科学省『中学校学習指導要領』東山書房、2015、p.15。
- 16 筆者は2013年11月に同校を訪問した。
- 17 訪問当日、国際バカロレア機構日本担当地域開発マネージャーである教諭より、同校におけるIBプログラムの実施状況をはじめ、取り組みにあたっての考え方などに関する説明を受け、授業を参観した。同校の学習観・授業デザインについて詳しくは、福山文子「国際バカロレアDP導入が国際理解教育にもたらす可能性」中央大学教育学会編『教育学論集』第57号、2015、pp.135-155を参照のこと。
- 18 Hein, George E. "Learning in the Museum", Routledge, 1998, p. 39.
- 19 MYPは本来5年のプログラムである。したがって、東京学芸大学附属国際中等教育学校は、MYPを部分的に実施しているといえる。また、2014年3月付けでディプロマ・プログラムの候補校にもなり、2016年4月に英

国際バカロレアを視野に入れた道德教育

- 語と日本語でディプロマ・プログラムを実施する「デュアル・ランゲージDPコース」を設置する予定である。
- 20 前節で論じたように、同校の教科横断的な学びを可能とする授業デザインのあり方が、この学習領域群にも活かされていると思われる。
 - 21 同校HPより。<http://www.iss.oizumi.u-gakugei.ac.jp/education/faq.html> (2015年9月20日取得)
 - 22 東京学芸大学附属中等教育学校HPより。<http://www.iss.oizumi.u-gakugei.ac.jp/education/> (2015年9月10日取得)
 - 23 国際バカロレアにおけるUnit Question とは、ある単元の枠組みを与える広がりのある、多面的な質問であると同時に、生徒が単元の本質に迫ることを導くべきものである。
文部科学省HPより。http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/095/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2013/08/19/1338545_02_2.pdf (2015年9月9日取得)
 - 24 パーソナル・プロジェクト (PP) は、MYP 最終学年に取り組む MYP の集大成のプロジェクトである。生徒は、自分が選んだ創造的で革新的なゴールを達成するために、これまで様々な教科や相互作用のエリア (AOI) の学習で学んだスキルを活用することとなる。
 - 25 この実践についてのみ、紀要の中で、中学校学習指導要領「道德」の「内容」との関連が明記されていた。
 - 26 平成27年度教科用図書検定調査審議会総会 (第3回) 議事録より。http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/tosho/105/gijiroku/1360487.htm (2015年9月18日取得)